

氏名	たけいし ようこ 武石 陽子
学位の種類	博士(看護学)
学位授与年月日	平成30年3月27日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科(博士課程)保健学専攻
学位論文題目	コペアレンティングを促す妊娠期の介入プログラムの開発 ー第一子妊娠中の日本人夫婦に焦点を当ててー
論文審査委員	主査 教授 吉沢 豊子 副査 教授 塩飽 仁 教授 佐藤 富美子

論文内容要旨

【背景】夫婦が子育てについての責任を共有し、サポートし合う関係性であるコペアレンティングは、今後の子育て世代にとって有益であり、夫の育児関与や産後うつ病の予防にも重要な視点である。このコペアレンティングを促進する介入方法として Family Foundation Program® (FFプログラム)が開発されており、このプログラムは夫婦のコミュニケーションの向上を狙いとし、妊娠期から始まる夫婦参加型教育プログラムとして注目されている。

しかし、本邦ではコペアレンティングの視点を持つ夫婦参加型教育プログラム導入までは至らず、深刻化しつつある夫婦の産後うつ病や産後クライシスの予防の観点からも、日本人に適したコペアレンティング促進プログラムの開発が待たれている。

【目的】FFプログラムの妊娠期介入部分を基に、日本人に適したコペアレンティング促進プログラムを開発する。

【方法】Feinbergらにより開発されたFFプログラムに使用許諾を得たのち、WHOの指針に基づき、コペアレンティングの研究者や母性看護学の研究者らの助言を受け、日本人向けに改良したコペアレンティング促進プログラム(本プログラム)の開発を行った。また、本プログラムの効果の確認のため、第1子妊娠中の日本人夫婦(初産婦の夫婦、男女)を対象としたプログラムを実施し、データを収集、分析した。参加者は全員夫婦で、全2回の本プログラムのクラスを受講した。データの収集は、研究参加時、児出生後1か月と3か月の計3回のアンケート調査を行った。調査内容には、コペアレンティングや夫婦関係などの評価指標を含んだ。分析方法は、研究疑問に基づいた統計分析を用いた。本研究は、東北大学医学系研究科倫理委員会から承認を得て実施した(2016-1-326)。

【結果】手順に基づき開発された本プログラムは、日本人への適用の面からFFプログラムに学習媒体・手段、内容、構成について変更が加えられた。その結果、本プログラムは全2回計4つのセッションからなる夫婦参加型プログラムとなった。

次の段階として、コペアレンティング促進プログラムの実施による夫婦への効果について、児出生後1か月時に得られたデータの分析を実施した。その結果、夫婦ともにコペアレンティングが促進されたと見受けられた高効果群は8組であり、夫婦ともにコペアレンティングが促進されていない低効果群は7組であった。低効果群の夫では、CRS-Jの下位尺度である子どもの前でのもめ事得点が有意に高く ($p=.026$)、低効果群の妻では、CRS-J 合計得点 ($p=.007$)、下位尺度の育児による親密性 ($p=.033$) と育児の合意 ($p=.003$) が有意に低かった。本プログラムにおいて、夫婦のコミュニケーションについての内容と、育児による親密性を高めるための夫婦の趣味についての内容を強化することの必要性が示唆された。また、その後のコペアレンティングへの効果を確認したところ、夫では CRS-J のネガティブな下位尺度の障害 ($p=.026$)、子どもの前でのもめ事 ($p=.034$) において主効果の高効果/低効果の2群に有意差が認められ、高効果群の夫ではネガティブなコペアレンティングが低く抑えられていた。妻では CRS-J 合計得点において主効果の高効果/低効果の2群に有意差が認められ、高効果群の妻では CRS-J 合計得点が高く維持されていた。コペアレンティング関連因子への効果としては、《親役割適応》の抑うつ、児への否定的感情ともに、高効果群では有意に抑制されていた。《夫婦関係》では妻のみに効果を認め、高効果群の妻では良好な《夫婦関係》を維持していたことが確認された。

【結論】本研究において、夫婦ともにコペアレンティングが促進されるように改良されたコペアレンティング促進プログラムを開発することができたと考える。そして、本プログラムは、わが国の日本人夫婦においてもコペアレンティングの促進にとどまらず、《親役割適応》や《夫婦関係》といったコペアレンティングの関連因子へ良い影響を及ぼす可能性があることが確認された。本研究の限界には、参加者バイアス、検出力、わが国におけるコペアレンティングの概念が挙げられ、将来的には、これらを克服した非ランダム化無作為試験により本プログラムの効果検証を行いことが期待された。

審査結果の要旨

博士論文題目 コペアレンティングを促す妊娠期の介入プログラムの開発-第一子妊娠中の日本人夫婦に焦点を当てて-

所属専攻・領域名 保健学専攻・家族支援看護学 領域

学籍番号 B5MD2009 氏名 武石 陽子

わが国では、生殖期年齢にある有配偶者女性の労働力率が6割を超え、今後さらに就労しながら妊娠、出産、育児に携わる女性が増えることが予想される。しかし、いまだに伝統的性別役割分業が根強く残っており、ワンオペ育児が女性の過剰負担を招いている。このような問題を抱える日本において、男性の育児介入が積極的に進められているがその解決策に限界がある。

本研究は、このような状況の解決に向けて「コペアレンティング」という新しい概念を導入する一つの策として、既に米国で開発された Family Founding Program® (FFプログラム) を参考に、日本におけるコペアレンティング促進プログラムの開発を目指す研究である。初めに、日本人に適した妊娠期に介入を試みるコペアレンティング促進プログラム(本プログラム)の開発に着手した。基本的には、WHOの指針もに基づき、FFプログラムの使用許可、翻訳を実施し、より日本人の特徴を考慮したプログラムを完成させた。次に本プログラムを非無作為化非対照介入研究のデザインのもと、第1子妊娠中の夫婦、夫婦双方が日本人である、夫婦双方に精神疾患がない、胎児に予後不良疾患がないという適格基準のもと15組の夫婦に対し、本研究者が介入者となり本プログラムを実施した。生後1か月児になった夫婦のコペアレンティングの促進の有無について、日本語版コペアレンティング(夫婦共同育児)関係尺度にて評価し、コペアレンティングが夫婦ともに促進したのが8組であった。下位尺度から分析すると、コペアレンティングが促進された夫婦の夫は、子どもの前でのもめごとが有意に低い値であり($p<.026$)、同様の妻は育児による親密性($p<.33$)、育児の合意($p=.003$)が有意に高い結果となった。さらにコペアレンティングの促進の有無および関連要因との関係は児が生後3か月になった夫婦に〈夫婦関係〉、〈親役割適応〉、〈子どもの適応〉のそれぞれの質問紙を用いて測定した。1か月においてコペアレンティングが促進していた夫婦において、〈夫婦関係〉、〈親役割適応〉で肯定的関連が示されていた。

本研究は、従来の親の様相から、新しいコペアレンティング(夫婦共同育児)という夫婦ともに第一養育者になることの必要性とその具体的な支援方法を日本に導入しようとした新規的な研究である。今後、このことを確証していくには、無作為比較介入研究が必要であるが、博士後期課程の研究からの今後の発展性を考えると、本論文は、博士(看護学)の学位論文として合格と認めることができる。